

美
し
い
人
々

カイガラムシが我が家の梅の木を制覇した。

「お父さん、大変」

暗くなつて家へ帰った私に家内が叫んだ。懐中電灯で幹を照らしてみると、木の裏側全体にカイガラムシの卵がびっしり張り付いていた。私はゾクツとした。木の下草を照らすと、卵からしたたつた脂で葉っぱ全体がギトギトしていた。

翌日仕事の帰りに今更ながら駆除の薬を買ってきて吹きかけたが、むろん効き目などない。ガリガリ引っ掻くと取れるが、なにしろ切りがない。そこでカセツトバーナーで炎を当ててみたら、脂の玉がブツブツと音を立てて赤く燃え上がりすぐに黒こげになつて死んだ。これだ、これに決めた。私はややスキツとして、カイガラムシ駆除の方針を立てた。

決行は次の日曜日。私はその日一日かけてカイガラムシの卵を焼き尽くした。木に対してゴメンな、ゴメンな、気づかなくてゴメンなとブツブツ話しかけ、心でもつぶやきを繰り返した。ムシに気づかなくてゴメンな、熱いだろゴメンな、焼き焦がしてゴメンな。そう言いながらも止められない。私はかなりムキになつていた。すつきりした思いで仕事を仕上げてみると、梅の木はすっかり焦げて全体が黒くなつた。古木のぼろ木のようになつた。後は、雨に濡らして新芽の伸びてくるのに期待するしかない。

この木は6年前に職場の同僚から譲り受けたものだった。当時2.5メートル程度の高さだったが、4メートルぐらいにもなり昨年からはじめて一升の升到二杯の梅の実がなつた。私は喜び勇んで郷里の親戚に連絡を入れ『秘伝の梅干し製法』を有無を言わず聞き出し、樽に入れた梅の実を秘伝に従って早速朝晩一週間力任せに揉み続けて昔ながらの味のする素朴な梅干しを完成させた。木は疲れると体

力が衰えて病気になるやい。次の年は実のなりが悪いというが、そのとおりだった。……

「メール、大変だよ」

私は必死になって、でも小声で叫んだ。メールというのはカトリックの修道院にある梅の古木二本が我が家以上の被害を受けているのを発見して、庭によく出ているメールに注意を促したのだった。修道院の梅の木は毎年実なりがよかつた。しかし今年はずつりとカイガラムシにやられていた。もう成虫化して羽の生えたやつが幹の裏側に飛ぶでもなく大量にしがみついているのもあった。

「メールほらっ」

「まあホントねえ。大変ねえ。何度も引っ掻いて落とすんだけどすぐまた上つて来ちゃうのよねえ」

八十過ぎのメールが幹を眺めながらのんびり答えた。

「だからそんなこと言っている場合じゃないってば」

「うちがあかかないと思つた私は、かといつてこの立派な枝振りの木をバーナーで焼いてゆくわけにもいかない。」

「このままだと梅の木がすっかりやられちゃうよ」

「注意だけしてほつとくしかなかった。」

「困つたわねえ」

もう知らない。この人たちを相手していると、きりがない。4代く5代はまだ小娘の世界。6代からお姉さん。皆さん、感性が実はとてもかわいらしい。

そんな訳で、我が家と修道院と、黒焦げか放置か、どちらの梅の木が生き延びるのか、競争になった。と言うと、張り合っているように聞こえるが、私が一人でムキになっているだけだった。なぜならあんまり悔しかつたからである。

ひと月経ちふた月経ち、メールの梅の木は虫が付こうが不変だった。さすがに梅のなりはいつもより非常に悪いが、古い枝はじっと持ちこたえていた。それはあたかも泰然としたメールと似ていなくもなかった。もしや虫がいなくなつたのかと覗いてみて、ゾクツとした。カイガラムシは相変わらず元気にびっしり張り付いていた。その梅の木の腰の曲がったメールが何事をなく行ったり来たりしている。

私の梅の枝は次々に死んでしまった。やっばりバーナーはきつかったか。かうじて二本の主要の幹から新芽が申し訳なきように伸びてきた。それもいつもに比べて勢いが無い。

メールの木は勤めの行き帰りに眺めるたびに、新芽の枝がいよいよ勢いよく伸びていた。

私は完敗した。